

白樂天にならう

東坡、四十歳代の波瀾の生活は、五十歳代になってもなおやまなかった。相変わらぬ新・旧法党のせめぎあいのなかで、東坡の人生も揺れ動く。

元豊八年(一〇八五)、神宗が崩じて哲宗が即位するや、政情は一変して旧法党が復権し、隠居していた司馬光が宰相に迎えられた。元祐元年(一〇八六)四月には改革を進めてきた王安石が世を去った。その九月、中央に復帰した東坡は翰林学士となり朝政に努めたが、二年あまりして程頤と争いをおこし、元祐四年(一〇八九)外任を乞い、七月、浙西路(浙江省)の総督、知杭州軍州事として再び杭州に赴任した。東坡は五十四歳になっていた。

杭州は、かつて若かりしときの任地であったし、同じ年ごろの白樂天が杭州刺史をつとめていた所でもあった。江南の地に立って、東坡は懐いを新たにしていたことであろう。なお、弟の轍が代わって翰林学士となっている。

予去杭十六年而復來，留二年而去。平日自覺出處老少，麤似樂天，雖才名相遠，而安分寡求，亦庶幾焉。三月六日，來別南北山諸道人，而下天竺惠淨師以醜石贈行，作三絶句

予杭を去りて十六年にして復た来る、留まること二年にして去る。平日自ら覚ゆ 出處老少 麤ほぼ 樂天に似たりと。才名は相遠しと雖も 安分寡求も亦た庶幾ちかし。三月六日 来りて南北山の諸道人と別る。而して下天竺の惠淨師 醜石を以て行を贈らる 三絶句を作る。

元祐六年(一〇九一) 三月六日杭州を去るにおよんで交遊した諸山の道人たちに別れを告げて歩き、下天竺寺の惠淨から醜石を贈られて作る。

【語釈】○自覺…自分で以下のように感じ取る。○麤…粗と同じ・安分寡求…己の分に安んじて欲求が少ない。○下天竺…杭州西湖の西の山中にある天竺寺。上中下三つある。○惠淨師 未詳。○醜石…ひねくれた形の石。石は醜いものが尊ばれた。

其一

青庚通韻

當年衫鬢兩青青

當年衫鬢 両ながら青々

強説重臨慰別情

強いて重臨を説いて 別情を慰す

衰髮祇今無可白

衰髮 祇今 白くす可き無し

故應相對話來生

故に応に 相對して 來生を話すべし

○衫鬢：ひとえの着物。青衫は身分の低いものがきる○重臨：臨とは、人が自分の方へ来ることという敬語。○祇今：今を二音節にのばしただけ。○白：嵇康の生前に「損を積みて衰を成し、衰より白を得、白より老を得、老より終を得」（嵇中散集卷三）

【解釈】十六年前に一度お別れした当時は、わたくしの着ていた衫も、もまた、髪の毛も、どちらも黒々としていました。あなたは「また、いつかここへおいでになることでしょう」と無理にもそうおっしゃって、別れの悲しみに耐えがたくていたわたしくしの心を慰めて下さった。いまこのたびの別れに際しては、抜け衰えたこの髪の毛が真っ白になるまで寿命がもちますまい。だから、今は対座して来世のことを話していただきましょう。

其二

出處依稀似樂天

出處 依稀として 樂天に似たり

敢將衰老較前賢

敢て衰老を將て前賢に較べんや

便從洛社休官去

便ち洛社に従つて 官を休め去らば

猶有閒居二十年

猶お有り 閑居の二十年

【語釈】依稀：彷彿。よく似ているさま。○洛社：洛陽の結社。白樂天は会昌五年（八四五）に、七十歳以上の老友九人の長寿を祝う尚齒会を催して、その肖像を描いて九老図とした。

【解釈】私の今までの経歴は 白樂天と実によく似ている。だからといって、この老い衰えた身を前代の賢人にひきくらべてみよう、などという大それたことはしない。ただ、樂天が引退して洛陽で尚齒会を作ったのなら、今、私も官をやめたならば、なお二十年間、閑居できることになる。

十六年たつて再来した杭州ではあったが、この地に留まること二年にして、東坡はまた中央に召還される。元祐六年（一〇九二）三月六日、杭州を去る際、付き合いのあった道人たちに別れを告げ、下天竺寺の恵浄から醜石（奇妙な形の石）を贈られて詠んだ絶句三首。白樂天の引退閑居への憧憬を詠う、東坡五十六歳の作。

白樂天は、進士及第後、塾屋県尉、京兆府戸曹參軍、太子左贊善大夫となったが、越権行為をとがめられて江州司馬に貶され、さらに忠州に移された。のち召還されて中書舎人となるが、外任を乞うて杭州刺史、蘇州刺史となり、のち病を得て洛陽に帰った。東坡が樂天を慕ったのは経歴が似ているからではない。西湖の泥をさらって堤を造ったり、風光をめでて詩を作る才能はもとより、なによりも、白樂天は、詩題に見られるように「安分寡求（分に安んじ、求むること寡い）」の清廉な官僚だったからである。

東坡は、蘇堤を築いたりして、なにかと樂天を見習ったが、引退して洛社を結ぶことはかなわなかった。

其三

在郡依前六百日

郡に在ること前に依りて六百日

山中不記幾回來

山中記せず幾回来たるかを

還將天竺一峰去

還た天竺の一峰を將ち去つて

欲把雲根到處栽

雲根を把りて到る処に栽えんと欲す

【語釈】○雲根：雲の生じる根元である石。

【解釈】杭州の滞在は、白樂天と同じく六百日だった。山中に寺院を訪ねたのは、樂天は十二回だったというが、私は何回になるのか覚えていない。樂天は天竺山の二個の石を持ち帰ったが、私もまた天竺山の峰を一つ持ち帰ることにしよう。そして雲根（雲の生じる根元である石）を行く先々で植えつけたいと思う。

連作の第三首。白樂天の詩をふ

三年為刺史

三年 刺史と為る

白樂天

まえて、樂天にならおうという

其二

其の二

五言古詩

入声陌韻

氣持を詠う。起・承句は、樂天

三年為刺史

三年 刺史と為り

の「天竺・靈隱両寺に留題す」

飲水復食藥

水を飲み復た藥を食らう

に「郡に在ること六百日／山に

唯向天竺山

唯だ天竺山に向つて

入ること十二回」を、転句は、

取得兩片石

兩片の石を取り得たり

樂天の「三年刺史と為る」二首

此抵有千金

此れ千金有るに抵たるも

の第二首をふまえる。

無乃傷清白

乃ち清白を傷つくること無からん

漢文大系

蘇東坡 近藤光男

蘇東坡一〇〇選 石川忠久 より抄出